The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	思考の言語とthought tructure
Author(s)	三藤, 博
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2023, 2022, p. 41-48
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91464
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

思考の言語と thought structure[1]

三藤　博

1.　はじめに

筆者は三藤(2021)において、Sauerland and Alexiadou(2020)のレビュー論文という形で、同論文が提唱している Meaning First approach という意味部門の処理が先行するモデルについて議論した。三藤(2021)執筆の後、Dupre(2021)において思考の言語と自然言語とを同一視する可能性について、近年の生成文法の進展を踏まえると従来の伝統的な反論のほとんどは解消されることが説得力をもって論じられたのであるが、伝統的な反論が解消された後に最大の問題点として残るのが「非文法的(ungrammatical)ではあるが容認可能(acceptable)な文」の存在である、と論じられている。本稿では、Dupre(2021)が思考の言語と自然言語との同一視において自然言語の側として措定している I-language に代えて Meaning First approach で提唱されている thought structure を措定することにより、Dupre(2021)が論じる「最大の問題点」も解消され、従って思考の言語と自然言語とを同一視する立場の説得力がいっそう強化されることを論じたい。

まず次節においてごく簡潔に Sauerland and Alexiadou(2020)における Meaning First approach、とりわけ thought structure について再確認した後、第3節において Dupre(2021)の立論にこの Meaning First approach を組み合わせる可能性について議論する。

2.　Sauerland and Alexiadou(2020)

すでに三藤(2021)において概観したとおり、Sauerland and Alexiadou(2020)においては、まず thought structure(conceptual structure とも呼ばれる)という構造が生成され、この thought structure に対して Compressor というメカニズムが作用してその出力として articulation が出力される、という全体像を提示し、この全体像を指して Meaning First approach と呼んでいる。つまり、生成文法において標準的に想定されてきているいわゆる T-model とは異なり、まさに Meaning First approach という名称が表しているとおり、thought stucture が言語の派生の出発点となると想定されているのである。thought structure の具体的な例として、次の(1)のような構造が挙げられている。

(1) [WE [[FOCUS PRESENT] [LIKE LINGUISTICS]]]

(Sauerland and Alexiadou(2020), p. 4.)

[1] すぐ下で直ちに明らかになるとおり、ここで言う thought structure とは、Sauerland and Alexiadou(2020)において提案されているものを指しており、一般的な意味での「思考構造」のことではない。

(1)からも明らかなとおり、thought stucture(conceptual structure)という名称ではあるものの、三藤(2021)でも論じたとおり、その実態は意味表示(semantic representation)に極めて近いものであると言え、Meaning First approach という命名もまさにこのことを表していると考えられる。

3. Dupre(2021)

Dupre(2021)は the language of thought（本稿においては以下「思考の言語」と訳出して使用する）が自然言語である可能性について、現代の生成文法の知見に基づきつつ、広く言語哲学的観点から考察を加えた論考である。

思考の言語が自然言語である可能性については、Fodor(1975)をはじめ議論されてきているが、従来は否定的な反応が圧倒的に多かったように思われる。Dupre(2021)では、この否定的反応について、それが生じてくるのは「自然言語」の理解が日常言語的な、つまり日本語や英語や中国語のような自然言語で、しかもそれらを素朴な形で捉えていることによるものであり、現代の生成文法の知見に照らせばそのような否定的反応はもはや妥当なものとは言えないことを説得力をもって論じている。すなわち、従来の伝統的な否定的反応が前提としているのは現代の生成文法が言うところの E-language に相当しており、Chomsky をはじめとする現代の生成文法で科学的な研究の対象となると措定されている I-language を考えれば、従来の伝統的な否定的反応はその論拠の多くを失うこととなる、と論じているのである。

その一例として、以下の(2)の引用を見よう。

(2) Once the distinction between an E-language, as a social object, and an I-language, as a psychological object, is made, it opens the door to a variety of questions about the nature of this psychological object, and its relation to both this social object and to observable linguistic behavior.

(Dupre(2021), p. 783.)

つまり、思考の言語を自然言語と同一視とする見方に対する伝統的な否定的反応が思考の言語と同定されるべき「自然言語」として想定してきたのは社会的なオブジェクトとしての E-language であり、それに対して、現代の生成文法の知見に基づくならば思考の言語として心理的なオブジェクトとしての I-language を想定すべきである。その上で、上の引用にあるとおり、社会的なオブジェクトとしての E-language との関係や観察可能な言語行動との関係などは、この I-language を介していわば間接的に検討されなければならない、ということになる。I-language と E-language の区別を認める生成文法の立場から見れば、この Dupre の主張は極めて自然なものであることは全く疑いを容れない。

このように Dupre(2021)は、思考の言語を E-language ではなく I-language と考えることで、伝統的な反論のほとんどはその有効性を失う、と論じている。この主張は極めて重要であり、真剣な検討に値するものであると言えるだろう。たとえば現実の自然言語が多様であることを捉えて、そのような多種多様なものを種としての人間の思考の言語であると想定することはできない、という伝統的によく現れてきた反論に対しては、I-language は普遍的な(universal, invariant)ものであると考えられるとした上で、次のように論じている。

(3) the language faculty is invariant across the human population. I-languages, states of the language faculty partially responsible for the acquisition and use of language, consist of a computational system capable of constructing complex representations out of simpler representations. The syntactic principles governing such construction are the same for all human language users, as are the conceptual/semantic principles governing interpretation.

(Dupre(2021), p. 790.)

このように考えれば、この I-language を思考の言語と同定することも十分考慮するに値する考え方となってくる。そこで Dupre が強調しているのは、生成文法に代表される理論言語学や心理学などの経験科学の発展のおかげで、現在はまさに思考の言語と自然言語（I-language の捉え方での）との同定の可能性の問題が、思弁的(speculative)、純粋哲学的な問題から生成文法や心理学をはじめとする経験科学が取り扱うべき問題へと移り変わりつつある時期である、ということである。

(4) hopefully they（神経言語学(neurolinguistics)などの最近の研究の知見　引用者補注）point to a further area in which progress in answering the philosophical question about the relation between thought and language can be made by drawing on work in the siences.

(Dupre(2021), p. 793.)

生成文法の発展とともに、コミュニケーションにおいて生じるような外界とのやりとりに関わる諸問題は E-language の問題であると考えられるようになっており、I-language は言語能力(language faculty)そのもののモデルであると考えられている。そうであれば、この I-language と思考の言語との隔たりは E-language と思考の言語との隔たりに比べてはるかに小さなものとなり、いわばその極限を取って両者の隔たりをゼロと考える、すなわち I-language がまさに思考の言語であると考えることには十分な妥当性があると言えるだろう。

このように、思考の言語を I-language として見た自然言語と同定することに対する伝統

的な反論は、その説得力をかなりの程度失うこととなるが、もちろん、であるからと言って反論の効力が全くなくなるというわけにはいかない。現代の理論言語学、神経言語学、心理学等の最新の知見に照らしてもなお残ると考えられる有力な反論として Dupre が挙げているのが、非文法的(ungrammatical)でありながら容認可能(acceptable)な文の存在である。少し長くなるが、本稿にとって最も重要な論点であるので Dupre の主張を見てみよう。

(5) The problem is obvious： if the speakers can interpret these sentences, i.e. the sentences express an available thought, but they cannot be generated by the language faculty, this suggests that the set of possible thoughts and possible natural language sentences are not even extensionally equivalent, let alone identical. Some thoughts are not expressible in our natural language, and so there must be some medium other than natural language in which they are expressible.

(Dupre(2021), p. 796.)

つまり、もしも思考の言語が I-language（上の引用では generated by the language faculty と表現されているが、同じことと見て差し支えない）であるとすれば、非文法的な文は思考の言語には含まれていないはずであるのに、現実には非文法的であっても容認可能な文が存在している。容認可能な文であるということは、その文の意味するところが理解されるということであるが、思考の言語の域外にあるものがどうして意味が通じて理解されるのか、説明に窮するというわけである。

思考の言語を I-language としての自然言語と同定する上での最大の困難であるとするこの非文法的であっても容認可能な文の存在について、思考の言語と自然言語との同定を主張する立場からどのように反論すべきかについて、Dupre は二つの方略(strategy)が考えられると論じている。一つ目の方略は形態音韻論(morphophonology)部門を複雑化することにより、非文法的な文は言語能力からの直接の出力（すなわち I-language）そのものではなく、形態音韻論部門を経て出力されたものであると考える。この場合、最近の生成文法の理論的枠組みである Minimalist Program の考え方にならって、形態音韻論部門はインターフェースの部分であり、I-language には属していないと考えることが前提となる。つまり、非文法性のよって来たるところを I-language からインターフェース部門である形態音韻論部門に移すことによって、思考の言語と I-langauge との同一性を維持しようという方略である。

二つ目の方略は「修復(repair)」という方略(strategy)である。「修復」とは、非文法的な文を文法的な文に変換するメカニズムであり、文が認容可能となっているのは変換された後の文法的な文に対する反応が現れているものである、とする。この二つの方略は密接に関連していることは明らかである。

ここで、以上見てきた Dupre(2021)の論考を Sauerland and Alexiadou(2020)と組み合わ

せて考えると、Dupre(2021)で言われている思考の言語と I-language との同定の代案として、Sauerland and Alexiadou(2020)における Meaning First approach で措定されている thought structure を思考の言語と同一視する、という可能性が浮かび上がってくる。

Dupre(2021)では思考の言語と自然言語との同定を検討するに当たって、自然言語の側では最新の生成文法の理論的フレームワークに基づいて議論を進めている。従って、生成文法の一貫した立場である「統語論の自律」から当然のこととして、I-language も統語構造として捉えている。しかし、Meaning First approach を考慮に入れると、思考の言語として純然たる統語構造を想定するよりも、Meaning First approach で措定されている thought structure を想定する方がはるかに自然であると考えられる。

その論拠となるのが、思考の言語の普遍性である。Dupre(2021)においても、思考の言語を自然言語と同定する立場に対する伝統的な反論の典型的なものとして、種としての人間の思考は同じ人間として共通、普遍的な基盤を有しているのに対して自然言語は多種多様である、という点を取り上げている。前節でも見たとおり、Dupre はこれに対して、多種多様な様相を呈している自然言語とは E-language であり、それに対して I-language は種としての人間の言語能力の出力として普遍的なものであるから伝統的な反論はその有効性を失う、と論じていた。しかし、I-language も統語構造として捉えると、やはりたとえば英語の統語構造と日本語の統語構造とでは異なっているのであり、もちろん E-language としての「英語」と「日本語」との隔たりよりははるかに小さなものであるとはいえ、完全に同一ということはできないであろう。もちろん、I-language は UG(Universal Grammar)の概念の言わば後継者として Chomsky によって提唱されたものであり、E-language との対比、対照とも相まって、普遍的な性格が極めて強いものであることは間違いない。しかし、しばしば I-languages と複数形でも用いられることからも明らかなように、I-language によって、UG、あるいは同じことであるが language faculty の（直接の）出力を指すことも多い。この場合には統語構造が想定されてくることとなり、上にも述べたとおり、E-language としてのたとえば「英語」と「日本語」との隔たりなどよりははるかに小さなものであるとはいえ、完全に同一ということはできないであろう。これに対して、Sauerland and Alexiadou(2020)の Meaning First approach で措定されている thought structure は基本的には意味表示と考えられるため、その普遍性は I-language に比べてはるかに明確である。また、Meaning First approach の枠組み全体の考え方から見ても、Dupre が論じている思考の言語として Meaning First approach の thought structure を想定することは、I-language を想定するよりも自然であり、説得力がより大きいと考えられる。

これまで見てきたとおり、Dupre(2021)では論考の前半で、思考の言語として I-language を想定することにより思考の言語を自然言語と同定する立場に対するこれまでの伝統的な反論の大半が解消されることを論じた後、論考の後半では思考の言語を自然言語と同定する考え方にとっては非文法的(ungrammatical)でありながら容認可能(acceptable)な文の存在が真の問題点となるとして、この点を詳細に論じている。

ここで Dupre が「容認可能(acceptable)な文」と言っているのは、彼自身も論文中に明記しているとおり、意味が分かる、意味解釈が可能な文、という側面をとりわけ重視した上でのことである。つまり、ここで問題となっている「非文法的でありながら容認可能な文」というのは「非文法的でありながら解釈可能な文」と同じことであると考えて差し支えない。この点は本稿の立論にとって本質的に重要な点であるので、ここで Dupre 自身の記述を引用しておこう。

(6) Calling such expressions 'acceptable' is a stretch, given that they do sound quite wrong. However, the importance of ungrammatical but acceptable expressions, for our purposes, was that <u>they could be interpreted</u>.

(Dupre(2021), p. 797. 下線は筆者による。)

(6)にも明確に述べられている Dupre の主張に基づいて、彼が思考の言語と自然言語との同一視に対する最大の問題点として挙げている「非文法的でありながら容認可能な文[2]」とは実質的には「非文法的でありながら解釈可能な文」のことであると考えて、以下論考を進めていくこととする。

上でも見たとおり、Dupre による「非文法的でありながら解釈可能な文」が思考の言語と自然言語との同一視に対する問題点となるとの主張の前提として、Dupre が自然言語の側の分析としては一貫して Chomsky が牽引してきた生成文法主流、Minimalism 以降の発展に至る分析に従っている、ということがある。つまり、まず統語構造が生成され、次にインターフェースを介して意味解釈や音声算出が実現される、といういわゆる T-model を前提として議論を進めているのである。

これに対して、Sauerland and Alexiadou(2020)の Meaning First approach では、最初に thought structure(conceptual structure)が生成されそこから出発する。この thought structure は前節でも概観したとおり、意味表示に極めて近い性格を有していることから、当然のこととして意味解釈可能である。Chomsky が牽引してきた生成文法主流派のモデルとは異なり、Meaning First approach ではこの意味解釈可能な thought structure から派生がスタートすることとなり、Compressor と呼ばれるメカニズムによってこの派生が遂行されることとなる。Compressor は、その名称からも明らかなとおり、情報量を縮減することはあっても情報量を増加させることはない、と考えて差し支えないであろう。とすれば、最初の thought structure の段階で規定された意味内容は言わば保存され、Compressor のメカニズムを経て出力されてくる言語表現も当初規定された意味内容のとおりに解釈可能であると考えられる。つまり、Meaning First approach のフレームワークによれば言語表

[2] (6)の引用にもあるとおり、Dupre 自身は expressions を用いている。しかし、その expressions の具体例として論文中に挙げられてるものはすべて文(sentences)であるので、本稿では「文」としている。「言語表現」を用いている箇所もある。

現は基本的に意味解釈可能であると言える。その上で、そのような意味解釈可能な言語表現の中に非文法的なものも含まれている（まさにこの点が Dupre(2021)が指摘する、思考の言語と自然言語との同一視に対する最大の問題点であったわけであるが）とすれば、それは Compressor の適用が適正に行われなかったためである、と極めて自然な形で説明することができる。

つまり、思考の言語として Dupre(2021)が措定している I-language ではなく Sauerland and Alexiadou(2020)において提唱されている Meaning First approach における thought structure を措定すれば、Dupre が指摘した思考の言語と自然言語との同一視に対する最大の問題点を解消することができるのである。思考の言語と自然言語との同一視に対するこの問題点以外の反論については、Dupre(2021)においてこの同一視の立場から極めて説得力のある擁護の議論がなされていることから、結論として、I-language に代えて Meaning First approach で提唱された thought structure を措定することによって、思考の言語と自然言語の同一視の議論の説得力をよりいっそう高めることができる、ということとなる。

なお、この議論に対して、Meaning First approach における thought structure はその名称からも一見示唆されるようにむしろ思考の言語の方に近いものであり、I-language に代えて自然言語の側に置いて思考の言語と対比させるのは無理があるのではないか、という反論が予想されよう。つまり、そもそも thought structure が思考の言語であると考えるならば、思考の言語と thought structure とを同一視すると言ってもそれは単なる自明な自己同一に過ぎないのではないか、という反論である。この反論に対しては、Meaning First approach における thought structure の実態を再確認することによって答える（この反論に反論する）ことができよう。Meaning First approach における thought structure は、その名称（上でも見たように conceptual structure という別名も与えられている）が一見示唆している所とは異なり、様々な理論形式において「意味表示(semantic representation)」と呼ばれているものにはるかに近い。従って、自然言語の側に属するレベル（表示）として、I-language に代わり得るステータスを十二分に備えていると考えられるのである。

4. おわりに

以上見てきたように、本稿では Dupre(2021)が思考の言語と自然言語との同一視において自然言語の側として措定している I-language に代えて Sauerland and Alexiadou(2020)において提唱されている Meaning First approach における thought structure を措定することにより、Dupre(2021)が論じるこの同一視に対する「最大の問題点」も解消され、これによって思考の言語と自然言語とを同一視する立場の説得力がいっそう強化されることを論じた。

参 考 文 献

三藤　博(2013)「意味論の基礎についての一考察」『自然言語への理論的アプローチ』（大阪大学言語文化共同プロジェクト2012）　41-48.

三藤　博(2021)「Meaning Fisrt approachをめぐって」『自然言語への理論的アプローチ』（大阪大学言語文化共同プロジェクト2020）　41-48.

Dupre, Gabe(2021) What would it mean for natural language to be the language of thought? *Linguistics and Philosophy* 44: 773-812.

Fodor, Jerry Alan(1975) *The Language of Thought.* Cambridge MA: Harvard University Press.

Sauerland, Uli(2018) The Thought Uniqueness Hypothesis. *Proceedings of SALT* 28: 289-306.

Sauerland, Uli and Artemis Alexiadou(2020) Generative Grammar: A Meaning First Approach. *Frontiers in Psychology* 11: 1-13.